

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	太田 誠
2. 審査委員	主査：(岡山大学教授) 黒崎東洋郎 副主査：(鳴門教育大学教授) 秋田美代 委員：(上越教育大学教授) 水落芳明 委員：(岡山大学教授) 渡邊満 委員：(岡山大学准教授) 藤井浩樹
3. 論文題目 <p style="text-align: center;"><b>算数学習における子どもの自律性の進展とその要因に関する研究</b>  <b>～RPDCAサイクルを活かした算数の学び～</b></p>	
4. 審査結果の要旨 <p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座太田誠から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成28年2月15日(月) 14時00分～15時00分          場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス第1講義室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第I章 問題の所在          IEAによるVideo Studyの調査では日本の算数の授業は優れた授業であると評価されるが、子どもの側に課題意識がないと結局教師に指示された活動を行っているにすぎないという問題点がある。また、日本の授業は欧米諸国に比べれば思考活動を重視しているように見えるが、教師の意のままに授業が進んでいるだけで、子どもたちの自律的な算数の学びになっていないという問題点がある。</p> <p>第II章 研究の目的及び方法          子どもたちが自律的に算数の学びに向かっているマネジメントサイクルを構築する。その際、教育実践学の立場に立って理論と実践を往還させて学校現場に役に立つ実践研究をする。研究の方法としては、「子どもの問いを視点に据えた授業実践」「子どもの自律性の進展を促す要因を見定め、RPDCAのマネジメントサイクルを活かした算数授業モデル構築」「RPDCAのマネジメントサイクルに沿った授業研究」の3つのカテゴリーに分け、研究協力と共同して算数の授業実践研究を進める。</p> <p>第III章 子どもの「問い」を視点に据えた授業実践          「算数が好きだ」という割合が減少している小学校高学年を対象に、子どもたちが「問い」を持ち、その「問い」がどのような影響を及ぼしていたのかを考察していった。その成果としては、子どもたちによる「問い」の風土を育てていくことで、授業の中で子どもたちが活動する場面が増えていくという示唆を得た。</p> <p>第IV章 太田算数の授業構造の現状分析と考察          子どもの「問い」が生まれてくる背景は何か、今までの授業記録の全容からでは見えないことも併せて、ここまでの筆者の授業の構造がどうなっているのか、また、大切にしてきたことは何かを実践研究という立場から整理していく必要性が出てきたために、5つの節に分けてまとめ直し、その上で、子どもの自律性の進展を促す要因と成り得るものは何かを分析した。</p> <p>第V章 めあてと振り返りを軸にしたRPDCAの算数授業モデル          ここまでの実践研究や普段の授業づくりの整理から、算数の学習において、子どもたちが自律性を高め、自ら学びに向かっているようなシステムの構築を図る必要があると考え、めあてと振り返りを軸にしたRPDCAの算数授業モデルを子どもの側に立って構想した。</p> <p>第VI章 マネジメントサイクルを視点に据えた授業実践          第V章で打ち立てた算数授業モデルの枠組みの妥当性を吟味するために、小学校の5年生29名を対象に、分数単元で授業実践を行った。その結果、RPDCAのマネジメントサイクルの中で、PとC、RとPにそれぞれ正の相関関係があり、授業の流れを点で終わらせることなく、学びを線でつなげていくことで、子ども自身の学びの連続性を生み出すことができるという示唆を得た。</p>	

## 第Ⅶ章 研究協力者による授業実践

RPDCA サイクルを活かした算数学習が一般的に機能するのかどうかを、4名の研究協力者とともに協働的、実践的に検証を進め、RPDCA のマネジメントサイクルに沿った授業研究を実践してもらった。その結果、子どもの自律的な学びを願う教師のもとであれば、どの学級でも子どもたち自身が学習のめあて (P) をもつことができるようになり、めあてに沿って学習の振り返り (C) を行うことができるようになっていく。さらに、授業プロセスの中でも多くの「子どもの問い」が生まれてくることが実証された。

## 第Ⅷ章 研究の総括

学校現場で授業を行っている教師が取り組みやすいように、R と P と C の枠組みを4段階に統一し、それぞれの様相を整理し直した。今後はこのマネジメントサイクルを活用し、子どもたちが自律的に算数の学びを構成していくことを期待する。

## 2. 審査経過

はじめに、本論文題目「算数学習における子どもの自律性の進展とその要因に関する研究～RPDCA サイクルを活かした算数の学び～」について、学位論文の論構成に即して研究発表がなされた。

続いて、5人の審査委員により、本学位論文に関する発表と事前に各委員に配布された学位論文の内容について、口頭で質問することによって本学位論文の審査を行った。第1の質問では、子どもの自律的に算数学習するために、子どもに「問い」を重視する研究の目的についての質問を行った。「問題の所在」「研究の目的及び方法」に触れながら、子どもの「問い」を重視する明確な意図の回答がなされた。第2の質問では、本論文の独創性、オリジナリティーに関わる「めあてと振り返りを軸にした RPDCA の算数授業モデル」「マネジメントサイクルを視点に据えた授業実践」について質問がなされた。具体的には、一貫した RPDCA サイクルの学習過程のまとまりにおいて、P (問い) と C (振り返り)、R (独自学習) と P (問い) を重視する趣旨と関係性、要因について質問を行った。これらの質問に対して、主体的な R (振り返り) ができれば、次の算数の (問い) が生成されやすいこと、それ以上に、R (独自学習) を行う習慣が形成されるレベルが高まると、算数の学習において P (問い) のレベルも向上することが説明され、ともに高い相関関係にあることが実証できたという明確な回答がなされた。第3の質問では、算数の授業は合理的・技術論的に数量や図形の知識・技能の習得になりやすいが、本研究は、こうした算数の授業の改革・改善にどのように貢献できるのかという質問を行った。この質問に対しても、本論文の提案する「RPDCA サイクルを活かした算数の学びは教師主導の形式的な知識・技能の習得に終始しやすい算数の授業を、子ども自らが主体的に学び、考える自立的な算数の学びへと転換することができる」という回答がなされた。さらに、研究協力者の授業研究のデータにおいても、子どもの自律的な学びを願う教師のもとであれば、どの学級でも子どもたち自身が学習のめあて (P) をもつことができるようになり、めあてに沿って学習の振り返り (C) を行うことができるようになっていき、さらに、授業プロセスの中でも多くの「子どもの問い」が生まれてくることも実証されたという明確な回答がなされた。

算数教育の実践における独創性、オリジナリティーがあり、新しい算数教育の実践への発展性、汎用性、貢献性が期待される研究として十分認められ、本学位論文は、学位に付記する専門分野の学校教育学において、算数教育へのパラダイムの転換を図り、主体性、協働性をキーコンピテンシーとする新しい算数教育に貢献するものとして判定された。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は太田誠の提出した学位論文が博士 (学校教育学) の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。